

サードハナリ
(生橋リ)

R・タゴール著
鈴木勲譯

七き父に献ぐ

譯者

（五）
八十一

卷本
目録



タゴール翁肖像と筆蹟

জোবা শুকিম বি কি শুনিম কি জব পায়েক কুনি
 মেলে আমে আমে আমে।
 দিলে দিলে পালে পালে দিন বহুনি।
 মেলে আমে আমে আমে
 লোয়েছি মাম যখন যত
 আমন মাম মাপারংমত
 মরুম মামে বেজেছে জব

畧 傳

ラビンドラ・ナート・タゴール (Rabindranath Tagore) は、一八六一年、印
 度ベンガル州の富裕なる婆羅門族の家に、宗教思想家たりしドボルカ・ナート
 ・タゴール (Dwarkanath Tagore) を祖父とし、同じきデーベンドラ・ナート
 ・タゴール (Dwarkanath Tagore) を父として生る。祖父は印度教改革派
 として有名なるブラーフマ・サマージ (梵教会) の後援者であり、父は同教会
 の元ニ代表者であつて、印度教は根本的に純粹精神的の一神教に在りとし、
 吠陀 (ヴェーダ) を研究し、ラバニヤットの教義に沉醉し、後にはこれ以外のも
 のは悉く捨て、依用せず、又印度にてはキリスト教の不要を考へたのである。
 タゴールは其の子として自らこの影響を受け、印度教の理念を詩や思想に南化
 せしめし、其の詩人並に思想家として世界に其の名聲を馳せたり、又、学園を自
 はよく東西文化の融合に努め、自ら其の作りに実践もし、我子に求むること
 望し、子弟の訓育にも當つたのである。英米にもよく演り、我子に求むること
 厚次、知友あり。一九一三年 (大正二年) には傑作ギータンジャリ (Gitangali)
 を英訳し、ノーベル文学賞を獲得、東洋の文壇の気ま吐いた。著作は
 二本書その他、考記 Gitangali, Fruit Gathering, 並に Evening Songs,
 the Gitanjali, Gitanjali, Brahma 等有名である。一九四一年 (昭和十六
 年) 歿す。タゴールは向後バヒバヒじめて我々の其の意味の祝福をよめるを信ず。

サードハナリー
一生の語り
目次

序文

譯者自序

原著者序文

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

譯註

個人と宇宙との關係

靈意

悪の問

自我の問

愛に於る悟

行動に於る悟

美の悟

神の悟

(其) 其の悟

……… 一

……… 六三

……… 一三五

……… 一八五

……… 二五七

……… 三二七

……… 三七五

……… 三九七

……… 一六五以上

譯者自序

印度は「印度人の印度」の時代もそこそこ
に、回教徒の支配に屈し、更に英國支配下の
奴隸的狀態に服し居りしを、今や八紘一宇の
日本の悲願の下に、「印度人の印度」し、「ア
ーリアーバルタ（聖民の國）し復興を目指し
て、一千有餘年にわたる屈從生活から脱却せ
んとしてゐる。かゝる印度にも、主として婆

羅門の力によつて文化史的には独自の印度を
持ち續けて来たことは刮目に値することであ
る。本書はかゝる文化維持者たる婆羅門族に
生れし著者が、印度固有の精神・思想が長い
年月のうちに自國はもとより、他國によりても
曲解・歪曲せ居るを慮り、中正なる理解を
与へんため、主要なる一聯の問題を八つ把之
来り、ヴェーダ、ウパニシヤッド、佛陀の教へ
ギータ等古典に依據しつゝ、解明し、又それら
古典の眞精神を自ら培ふ處によつて教示・宣明

せしもののである。而して我々はこゝに一巻の
 人生論を得べく、若々しくも落着ける、暗け
 に見えて冥は明るく、しかも生々々せする永遠
 の生をつかみ、老人臭く隠遁的になるには小し
 こゝ巨大なる杉木の如く森嚴にして優美なる
 東洋的の人生思索の大を讚美するであらう。
 印度と云へば佛教をしか想像しなひ人々は
 勿論、「殺す！」と云へば、「いな死す！」し
 と答ふる印度を知らる人々にとつては、本書
 は不啻すると深く、考へさせらるゝと云ひ
 である。讀者はこゝに機縁に、更に深く印度
 の思想・精神に喰ひ込んで行かざることも
 未やう、本書は「云ふ入門書」としての意義
 も果して莫小。
 讀者が、車垂共栄園の良き同志として印度
 を迎へんとしつゝある今日、本書により、と
 にかく印度の一掃を知り、内が印度をば印度
 たらしめしかさ思ひ、その将来を暖く思ひや
 ら小るに於ては、本記業の目的は達せらるる
 のである。

本書読了については、恩師日野月明喜教授
 (現新潟高等学校長)の御学恩、並に畏友
 丹羽十年文学士(現四條畷中学校在職)の世
 盡力に預る所更に多大であつた。茲に感謝の
 意を表すの次第である。

尚本訳については左を原典とした。

Sakurana (The Rectification of Life); Touching, Leipzig.

昭和十九年三月

縮印小境の裁断なる日

譯者

原著者序文

本書に発表される諸論文の主題は、哲学的
にも取扱はるが、学究的見地から取上げら
るゝおなひこととお断りして置く。余は優波尼沙土ウパニヤドの
とり好都合なこゝである。余は優波尼沙土の
經典が日常禮拜に使用される、家庭に人となり
、現に余は、世間に対する義務を怠らぬ、又
は凡中の俗事に対する切實な関心を敢て軽減

してまひ神との最も緊切な交りの裡に長い生
涯を送つた父(2)の生例を持つておるのである。
そこで、本書の讀者は我々の聖典の裡に再現
される、且つ今日の生活に示現されるおのゝ印度
の古代精神に觸れる機会を得られることゝ存
ず。
人間の偉大なる叫びの全ては、文字に依つ
てでなく、精神——歴史に於て人々の成長に
つゝて発現する精神に依つて判断されるべき
らなひ。我々はキリスト教の眞義をよしそ

ルが原始キリスト教と重要点を異るとも、
現在の相を觀察するに、
る。

西洋の学者にとつては、
教的聖典は、單に回顧的、
無に存に見える。然し我々に
言なのびある。しかれ我々は、
列箱に容れらるる、博學の外被に包まれ終始
保存せらるる人々の思想や願望の本質を
標本として展覧せらるる。其の意味を失ふ
と考へざるを得ない。偉大なる人々の
發露した活言の意味は、決して、如何な
だつた論理的解釈を以てしても盡し得る
ではない。それは、個々の生活によつて
しなく説明するべきであり、
神種を増して行くのである。余にとり、
尼沙土の節々、⁽³⁾ 佛陀の教へは、
るものびあり、それは無限の活力ある
成長を賦与して呉れるのである。余は此
自己の生活に於て、説教に於て、用ふる

。此等は他人にとつてと同様、自命にとつて
 独特の意味に満ちてゐるものと考へらるゝ又
 此等の確証、即ち、その独自性故に價値を有
 すべし余自身の独特の説明を期してゐるもの
 と考へらるゝが故である。

本書の諸論文は、ベンガル州 (Bengal) ボル

パー (Bardpur) に在る余の学校の教へ子に授け

る習慣になつてゐるベンガル語の講話の幾つ

かから擇り出された諸思想を、本出版に適は

しく、肉聯せる形をとつて具現してゐることに

ま一言附加すべしであらう。そして余は、此

處彼處に、余の友人、バブ・サティシユ・チャンド

ラ・ロイ氏 (Babu Satish Chandra Roy) とバブ・

アジト・クマル・チャクラバルティ氏 (Babu Ajit

Kumar Chakravarti) が翻譯せる此等講話中の

幾章かを使用した。この論叢の序文の論文、

「行動に於る悟り」は「羯磨瑜伽」に關する

ベンガル語の講話を錫のバブ・スレンドラ・

ヤート・タゴール (Babu Surendra Nath Tagore)

が翻譯したものである。

余は、此機会を利用し、ハーバート大学に
 エームズ・エイチ・ワッツ教授 (James H. Woods)
 が此の一聯の論文を定稿させ、その大半多く
 を同大学で講ずるにつき力付けて頂かし寛大
 な世理解に對し感謝の意を表したい。又、余
 に種々不唆を与へられ且つ校正刷り玉聞せら
 れし、アーネスト・ライス氏 (Ernest Rhye) の
 世親切に感謝を捧げるものである。

一言 *Sadhana* の発音に就いて申し加へれば

、アクセントは右の字音を持つ最初の R に決

定的に置かれるものである。

以上。